

解題

平曲研究所 鈴木まどか

序

本事業の目的

「平家吟譜」「平家正節」「平曲吟譜新集」

書誌

鳴海家本「平曲吟譜新集」

デジタル処理にあたって

ウェブ掲載について

平曲吟譜新集跋

伝承系譜、楠美家略系図

「平曲吟譜新集」と館山家所蔵の譜本

収録句一覧、索引（平家正節順）

謝辞

（尾崎正忠）

（館山宣昭）

※巻末より

序

『平家正節』は、荻野検校が安永五（1776）年に名古屋で編纂した平曲の譜本である。この譜本編纂の後には、大がかりな整譜事業は行われていないので、平曲譜本の完成版とでもいうべきものである。この『平家正節』による語りは、名古屋を中心に伝承を続け、京都・江戸へと伝播していった。そして、その伝承の広がりに伴い、譜本は筆写を繰り返して多くの写本が作られた。

『平家正節』の写本は、各地に数多く残されているが、これらの写本は、その伝承の系譜に従い、名古屋系の写本と江戸系の写本とに大別される。名古屋系の写本は総じて古く、祖本に類似するものが多いのに対し、江戸系は比較的新しく、さまざまな時代にわたる写本がみられて、その後の伝承の様子を窺うことができる。

文書は書写を繰り返すと誤りが増えて原著の内容を損なうものであるが、譜本は稽古の個人用テキストとして書き写されるから、書写の際に気付いた誤記の訂正をはじめ、筆記者の技量に応じて、語りに必要な注記が加えられる。詞に読み仮名を付したり、墨譜に詳細を書き足したり、また、ゴマ点を付して墨譜の位置を明確にしたり、さまざまな工夫が加えられて、転写を重ねることに精密な譜本へと仕上がっていく傾向がみられる。

今回、公開されるDVD版の鳴海家本『平曲吟譜新集』は、『平家正節』の江戸系写本の一つである。明治十七（1884）年に完成したというから、『平家正節』が安永五年に編纂されてから八十年を

経ている。おそらく、現存する写本のうちでは、最も新しいものの部類に属する。編者の津軽平八郎は、津軽藩士・楠美太素の平曲の門弟であるが、主家筋の門弟であるから、ずいぶん丁寧な指導を受けたことであろう。太素長男の楠美晩翠の記した跋文によれば、二十余年の歳月をかけての労作というから、この譜本の編集に並々ならぬ努力と情熱を注いだものと推察される。

『平曲吟譜新集』は、師匠・楠美太素の所蔵本を筆写したものとと思われるから、江戸系写本としては、素性の良い譜本である。内容を拝見したところ、その紙面は整然とした文字で埋め尽くされ、振り仮名や墨譜の記載も正確で、編者の几帳面な性格を窺わせる。数ある写本のなかでも、最も優れた譜本であると言える。『平家正節』の祖本が平家物語を解体して「巻通し（巻之一から巻之十二まで一句ずつ抜粋したもの）」に編集しているのに対し、本譜は平家物語の順に詞章を配列し直している。したがって、平曲テキストとして活用できることはもちろん、平家物語の鑑賞にも役立つ珠玉の一編である。

今日まで秘蔵されてきたこの譜本が、関係者の英断で公開されることは、平曲関係者の喜びとするところであり、また、研究者の期待も大きい。出版に尽力された皆様に、心からの敬意を表したい。荻野検校顕彰会では、尾崎家本『平家正節』のDVD版の公開を近く予定している。これが実現すれば、荻野検校の蔵書印のある祖本と、百年余り後に津軽で編集された完成度の高い写本とを対比しながら鑑賞することが可能になる。その日の来るのが今から楽しみである。

荻野検校顕彰会

代表 尾崎 正忠

本事業の目的

現代の平曲演奏家が用いる譜本は「平家正節」であるが、教習順に編纂されているため、平家物語の順に演奏・鑑賞するには不都合である。「平曲吟譜新集」は平家物語の順に再編纂した「平家正節」で、幕末〜明治期にかけて、平曲相伝者が演奏する立場で書き写したものである。

そこで、本事業では、「平曲吟譜新集」をデジタル撮影しDVDに収録することにより、原本の複製保存を図るとともに、平曲伝承者と研究者に広く利用の便を図る。ただし、デジタルデータの独り歩きを避けるため、DVD製作数は三十部とし、関連研究機関と相伝者に限定して配布する。

なお、「平家正節」一之上下を中心に、有名な章段を二十句ほどウェブ公開することで、演奏者・鑑賞者の自由な利用の便を図っている。将来的に尾崎家本「平家正節」DVD版が公開されれば比較が容易になり、学生や研究者への資料提供としても有効である。

※ ウェブ公開版 平曲研究所 <http://www.heikyoku.org>

「平家吟譜」「平家正節」「平曲吟譜新集」

平曲とは、平家物語に節をつけ平家琵琶の伴奏で語るものである。平家琵琶、平家、平曲、平語、平吟、平家詞曲、平家音楽などと呼ばれ、中世の記録では「平家」と称されているが、本事業では「平

曲吟譜新集」の題を尊重して平曲と表記する。

平曲は盲人職能集団「当道座」の最高位検校を中心に伝承されてきたが、江戸初期には武家や茶人など晴眼の者たちも平曲を学ぶようになっていた。茶人の一尾伊織や山田宗偏は多数の平家琵琶を製作し、宗偏流の門人・岡村玄川は元文二（1737）年に「平家吟譜」を編纂した。「平家吟譜」は宮崎文庫記念館蔵本でも明らかにされたとおり、平家物語順に編纂されている。

いっぽう、安永五（1776）年には尾張で荻野検校が「平家正節」を編纂した。これは内容や技術が平易な句から始まる教習順になっている。平家正節一之上には卷之一から卷之六までの句を一句ずつ、一之下には卷之七から卷之十二を一句ずつ収めるので、平家物語卷之一から卷之十二までの句を一句ずつ語る「巻通し」には便利だが、話の流れをつかむのには不自由である。

弘前藩では藩政のため、宝暦四（1764）年以降、藩士楠美家が参勤交代時に江戸で平曲を習得し、国許において藩士たちが平曲を伝承していた。万延元（1860）年より平曲を学んでいた津軽平八郎も弘前藩士の一人で、「平家正節」を「平家吟譜」のごとく平家物語順に再編纂して「平曲吟譜新集」とし、明治十七年に全十二巻を完成させた。士大将兼院参として戊辰戦争などで中断しながらの労作である。「間の物」を含むので平家物語の顛末どおりに平曲を語ることができ、「換節」を含むので変化に富んだ語りが可能である。多くの口伝を加筆した最も語りやすい譜本でもある。句の編纂順は、「平曲古今譚」に紹介される「片仮名美濃紙板本平家物語（元和七年開板）」と一致する。

「平曲吟譜新集」は楠美晩翠弟の佐野楽翁の所有となり、現在は楽翁末裔の鳴海家が所蔵している。

書誌

所在 青森県弘前市 鳴海家蔵（個人、非公開）

書形 写本。全十二冊。縦約二三・五糎×横約一六・七糎。半紙袋綴。

表紙 縹地唐草模様表紙。左肩に打曇の題簽。

料紙 美濃紙

書写年代 文久年間より明治十七年四月まで。津軽平八郎編。

巻数 巻一から巻十二（灌頂巻含む）まで、十二冊。

丁数 「平曲吟譜新集」巻一（二〇八）、巻二（二二三）、巻三（二〇九）、巻四（二〇九）、

巻五（二〇〇）、巻六（七八）、巻七（二〇九）、巻八（八六）、巻九（二三五）、

巻十（二〇七）、巻十一（二一四）、巻十二（二〇八）。

行数 七行。

蔵書印 「佐埜蔵」（朱。縦約二・九糎×横約一・四糎）。

「坂上津軽」（朱。縦約三・五糎×横約一・五糎）。

「居處恭執事」（朱白文。縦約五・一糎×横約二・二糎）。

奥書等 「平曲吟譜新集卷十二 跋（後述）」

鳴海家には、このほかに「平家正節抄」四冊と「平家正節灌頂之卷・大小秘事」一冊が所蔵されている。DVDにはこの五冊についても収録したが、Web上では公開しない。

丁数 「平家正節抄」抄一（六七）、抄二（六七）、抄三（七二）、抄四（七六）。

「平家正節灌頂之卷・大小秘事」（七四）。

行数 七行。

蔵書印 抄二表紙と抄四表紙に「楠美蔵」（朱。縦約三・七糎×横約一・三糎）。

灌頂之卷目次に前出の「佐埜蔵」「坂上津軽」「居處恭執事」と「佐埜蔵」（朱。子持杵。

縦約三・七糎×横約二・四糎）。

奥書等 「平家正節抄」四冊とも最終丁ウラに「明治十六年十一月佐野樂翁（花押）」、

抄四表紙裏に「奉納諸神靈／右折笠君ノ宅ニ於テ謹吟／明治十六年二月十六日 佐野樂翁」。

「平家正節灌頂之卷・大小秘事」大秘事之卷目次ウラに「明治三十一年きさらぎの日、東京に物しける于、深川区深川誓願寺に住ける大教正深川照阿氏に平曲大小秘事の巻を授けたれば読はべりける／よつの緒のふるきたふものひとふしを／あはれみやこにつたへけるかな／樂翁」※深川照阿は、天保四年、幕府寺社奉行支配下の生という。

その他 「平家正節抄五」が存在していたとの伝があるが、所在は不明である。

また、「平家正節抄」は表紙と目次に相違がある。「文覚勸進帳」「伊豆院宣」「都還」「横笛」の四句は表紙に朱点を付して示すのみで、目次にも本編にも収録されない。

鳴海家本「平曲吟譜新集」

まず特筆すべきは、状態が極めて良好であるということである。虫食いによる欠落は見当たらない。唯一、「那須与一」の「ひいふつと」の「ひい」の字と、そこに重なる数枚に小さな破損が見られるだけで、語るのに不都合はない。虫害を受けにくい料紙を使っていることも考えられるが、何よりも鳴海家において定期的に虫干しを実施して大切に保管されてきたことを忘れてはならない。

この素晴らしい状態の全巻揃いの譜本をデジタル化できる機会に、心から感謝している。

次に、特徴を列記してみる。

一、収録句数

平家正節全一九九句のうち、大秘事三句を除く一九六句を収録する。ただし小秘事は相伝者以外に知られぬようにとの配慮で墨譜を記さない。また小秘事「延喜聖代」は目次に掲載しない。

「僧都死去」は「有王島下」からの分句、「東国下向」は「富士川」からの分句、「生好」は「宇治川」からの分句、「北方出家」は「藤戸」からの分句、「壇浦合戦」は「遠矢」からの分句と扱い、目次では元の句の下に朱書し、本文では題を欄外に記す。「鶏合」は元の題を「壇浦合戦」と扱う。

一、目次

収録句の上部に朱書で「平家正節」の収録巻を示す。

一、改行、改頁

尾崎家本「平家正節」等では、句が変わることに料紙を改めるが、「平曲吟譜新集」では改行して次の句の題を記し、さらに改行してすぐに本文が続く。題が七行目（ページの最終行）となっても改頁はない。分句がある場合には元の題を墨書し、分句するところで改行し、その題は欄外に朱書する。「換節」は改行して字下がりとする。換節が終わると改行する例が多い。「間の物」のうち、「宇佐行幸」と「先帝御入水」は、正節が始まるところで改行する。

例外は以下のとおり。

「我身栄華」は題の前後に一行あき。

「山門滅亡」「大衆揃」「元坊（還亡）」「木曾山門牒状」「樋口被斬」「敦盛最期」「落足」

以上七句は題の前に一行あき。

「維盛都落」は題の前に二行あき。

「維盛出家」は題の前に三行あき。

「戒文」「勝浦合戦」以上二句は改頁（題の前に一行あき）。

「鼓判官」「一二駈」以上二句は改頁（題の前に二行あき）。

「少将都還」は改頁（題の前に三行あき）。

「妓王」は約三分の一、「口説毎月贈れける百石百貫をも止められ」で改行。

「女院御出家」は改頁。

一、墨譜

本文の読み仮名の右に文字譜で示される。本文の漢字一字に墨譜が複数つく場合、読み仮名は二字または三字までとすることが多く、送り仮名または当て字が用いられる。政(まつりごと) ↓政(まつり) 事(こと)、蒙(こうむ) る ↓蒙(こう) むる、など。

読み仮名の右に朱で墨譜が書き足されることがあり、原本との照合時に補ったものと思われる。本文の左側にも朱で墨譜が書き足されることがあり、吟譜など他の本に存在した墨譜と思われる。いずれも、原本が定かではないので結論は出せないが、本来の墨譜だけでは語りにくい場合に大いに参考になるものである。

一、朱書

本文、読み仮名、墨譜のほかに、朱を加えることで、情報量を増やしている。

曲節の囲み線、琵琶の手を示す文字や記号、連平家の表示(朱書の貼り紙または囲み線)、墨譜の補足、欄外の覚え書きなどである。

連平家は、導師を示す「トウ」、脇を示す「ワキ」、連れて語ることを示す「ツレ」の字を小さな紙片に朱書して貼ることが多い。この際、墨譜に重なっていたものは、デジタル処理の都合で墨譜が部分的に見えなくなるが、前後関係から墨譜の推定は容易く、語りに不都合はない。

一、濁点

本文の漢字に直接、濁点を付して読み方を示すのは、尾崎家本「平家正節」や宮崎文庫記念館蔵本

「平家吟譜」と同様である。

読み仮名の濁点には、写本時に前後したものや琵琶の手を示す記号と混同したものもあるが、古い時代の子音を示すと思しきものもあり、今後の研究を待ちたい。いっぽうで清音をあらわす「ス」（澄む）も多く見受けられる。

なお楠美太素が江戸の旗本や他藩の藩士の「平家正節」を写本したことや、当時の弘前藩士の書簡から類推する限りでは、津軽弁による濁点の可能性は低いと思われる。

一、その他

間違えた箇所を貼り紙で訂正することがある（デジタル処理の都合で、画像では確認できない）。

書写の後に製本したとみられる。「灌頂之巻／大小秘事」では、綴じ目近くまで朱書があるためにスキヤナで読み取れない部分があった。「抄四」と「灌頂之巻／大小秘事」では、製本時の裁断で文字が欠けたものもある。

変体仮名の傾向や書体が、句によって異なることがある。幕末と明治維新を経て二十年余りを費やしたので津軽平八郎の変化とも考えられるし、書写の元となった譜本の特徴を写したとも考えられる。以上、必要かつ十分な情報が書き込まれているため、「語りやすい」譜本といえる。

デジタル処理にあたって

「平曲吟譜新集」一式を鳴海家より預かり、裏面写り込みを軽減するために間紙を入れた上で、印刷会社（株式会社キョーコロ、東京都葛飾区）にて慎重にスキャナで読み取り撮影した、

教習目的で印刷することを鑑み、黒と赤の二色に画像を調整し、和紙に生じた皺の写り込みを除去。原本と画像を照合して汚れ削除などの画像処理を行い、再度色の調整とページ番号の付与を行った。ページ番号はデータ管理を優先し、丁数ではなくページごとに割り振った。奇数ページは丁の表、偶数ページは丁の裏である。ただしDVDでは丁ごとに表示している。

当初はデータのみをCD・ROM十七枚に収録する予定だったが、データの保護と利便性を考え、DVD一枚に収録した。

ウェブ掲載について

正節一之上下（全十二句）から十句、名古屋伝承句八句、伝授物三句に、「換節」、「間の物」を含む合計二十句を選んで掲載した。また、「平曲吟譜新集」ならではの平家物語順の句も加えた。

掲載にあたっては、株式会社コムネットクスが運営するBookTus（ブックタス）の変換サービスを利用し、ページをめくる要領で譜本が閲覧できるようにした。掲載句は次のとおり。

| | | |
|-----|------|------------------------|
| 卷一 | 祇園精舎 | 平家正節小秘事（伝授物、冒頭の一ページのみ） |
| 卷一 | 鱸 | 平家正節一之上、名古屋伝承句、換節、祝儀 |
| 卷一 | 桜 | 初心者が学ぶ一節、祝儀 |
| 卷二 | 卒都婆流 | 平家正節一之上、名古屋伝承句、換節 |
| 卷三 | 無紋沙汰 | 平家正節一之上 |
| 卷四 | 鶴 | 平家正節四之上、祝儀 |
| 卷五 | 月見 | 平家正節一之上、換節 |
| 卷六 | 紅葉 | 平家正節一之上、名古屋伝承句 |
| 卷七 | 竹生島詣 | 平家正節一之下、名古屋伝承句 |
| 卷七 | 忠度都落 | 平家正節三之下、連続句 |
| 卷七 | 経正都落 | 平家正節四之下、連続句 |
| 卷八 | 宇佐行幸 | 平家正節一之下、間の物 |
| 卷九 | 生好 | 平家正節一之下、名古屋伝承句、連続句 |
| 卷九 | 宇治川 | 平家正節三之下、名古屋伝承句、換節、連続句 |
| 卷九 | 敦盛最期 | 平家正節二之下 |
| 卷十 | 海道下 | 平家正節一之下 |
| 卷十 | 横笛 | 平家正節二之下、名古屋伝承句 |
| 卷十一 | 那須与一 | 平家正節一之下、名古屋伝承句 |
| 卷十一 | 腰越 | 伝授物（読物、後半の九ページのみ） |
| 卷十二 | 小原御幸 | 伝授物（灌頂巻、冒頭の五ページのみ） |

平曲吟譜新集跋

「平曲吟譜新集」卷十二の巻末に収録された跋文と要約を掲載する。跋文の改行は原文とは異なる。また、読みやすいように適宜句読点を加えた。

平八郎君、一日平曲吟譜新集ヲ携来リ、余ニ跋文ヲ囑ス。即チ繰テ之ヲ閲ス。巻首ニ祇園精舎之句ヲ録シ、巻尾ニ御往生ヲ記シ、全部十二巻トス。間之物及ヒ換節、五句揃、炎上物、源氏揃等、亦年代順次に記載ス。其製頗古平曲吟譜ニ倂フ。加之肝文之句、亦順次に録ス。而シテ大小秘事ノ句ニ曲節ヲ省クモノハ、平曲者ノ秘事ニ係ルヲ以テナリ。君之此ヲ修録スル意ヲ付度スルヤ、安永中荻野檢校改正平家正節本ハ、故サラニ句々ノ位置ヲ顛倒シテ事跡順次ナラス。故ニ、一句ヲ吟シテ容易ク前後ノ段落ヲ知ル能ハス。君曾テ之ヲ厭ヒ、因テ此ノ挙アル所以ナリ。抑、君ハ我旧藩主津輕家ノ支族ニシテ名門タリ。夙ニ文武ヲ好ミ、能ク下僚ヲ鼓舞ス。就中馬術弓芸ニ達シ、亦書ヲ善クス。万延元年庚申、折笠儀正ニ就キ平曲ヲ学ヒ、後チ余カ先人太素ニ学フ。遂ニ灌頂之秘ヲ伝フ。自ラ平家正節全部ヲ騰録ス。尚新集ヲ修録シ、業未タ半ナラス。文久中、国家之多事ニ遭ヒ、爾来人事匆忙、平曲亦將ニ地ニ落ントス。明治十五年三月廿二日、太素病ヲ以テ歿ス。晚翠、廿年前ノ往事ニ感アリ。平曲ノ遂ニ湮滅センコトヲ恐レ、之カ再興ヲ謀ル。君及ヒ諸輩、大ニ之ヲ懲慙ス。其九月ヨリ、月々旧藩主香花院報恩寺ニ於テ奉納会ヲ開キ、又月々日ヲ期シテ吟演スルコト六回。是ニ於テ、平曲大ニ旧時ニ復ス。君再ヒ曩ノ吟譜ヲ継

録ス。客歳四月、晚翠ヨリ小秘事ヲ伝フ。今年又大秘事ヲ伝フ。茲ニ四月、吟譜修録大成ス。前後凡ソ二十有余年ナリ。古語ニ曰ク、有志者事遂ニ成也ト。君之謂ナリ。君ノ平曲ハ、概シテ平調ニ発シ、緩急長短能ク、節度ニ適シ、後学ヲ教授スルコト聊誤謬ナシ。余常ニ之ヲ嘉ス。併書シテ以テ跋文トス。

明治十七年四月 弘前 楠美晚翠誌

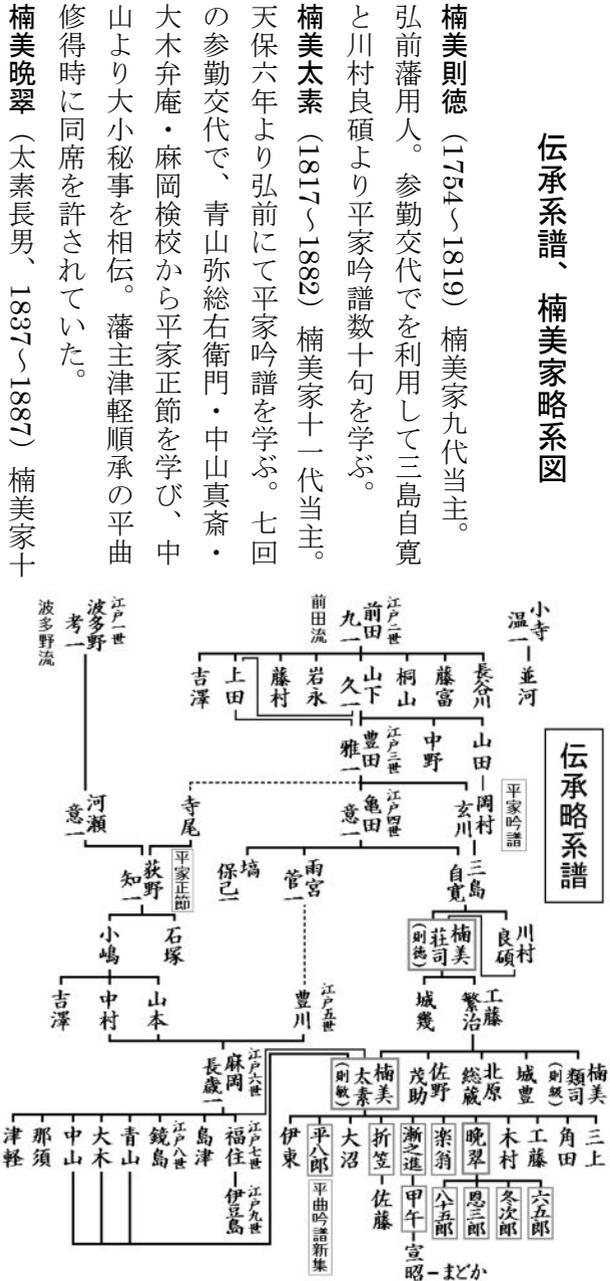
津軽平八郎は、荻野検校が教習順に編纂した「平家正節」を、平家物語の順番に再編纂し、間の物（あのもの）や換節（かえぶし）や伝授物を含めて全十二巻の譜本とした。「平家正節」以前の「平家吟譜」が年代順（平家物語どおりの順）に記されていたことから「平曲吟譜新集」とした。なお大秘事を省略し、小秘事の節博士を省くことで、相伝者以外に知られぬように配慮している。

津軽平八郎は旧藩主津軽家の支流で、文武両道である。万延元（1860）年より、折笠儀正、楠美太素に平曲を学び、灌頂を修め、「平家正節」を書写し、さらに新集を録しはじめた。文久以降は世の中が騒がしく、平曲も存亡の危機を迎えた。明治十五（1882）年太素が病死し、長男の私が平曲の再興を諮ると、平八郎も皆も勧めてくれた。その九月から弘前報恩寺で毎月奉納演奏をし、毎月六回の平曲会を行った。平曲は復活し、平八郎は吟譜新集に再び取り組み、昨年四月に小秘事を、今年は大秘事を修得した。今年四月、平八郎の志が実り、二十有余年をかけた吟譜が完成した。平八郎の平曲は緩急自在で、後進の指導も適切であることを記して跋文とする。

明治十七（1884）年四月 楠美晚翠

伝承系譜、楠美家略系図

伝承略系譜



楠美則徳（1754～1819）楠美家九代当主。弘前藩用人。参勤交代でを利用して三島自寛と川村良碩より平家吟譜数十句を学ぶ。

楠美太素（1817～1882）楠美家十一代当主。天保六年より弘前にて平家吟譜を学ぶ。七回の参勤交代で、青山弥総右衛門・中山真斎・大木弁庵・麻岡検校から平家正節を学び、中山より大小秘事を相伝。藩主津軽順承の平曲修得時に同席を許されていた。

楠美晩翠（太素長男、1837～1887）楠美家十二代当主。安政四年より平曲を学ぶ。大秘事相伝。明治元年京都留守居役。太素没後は、平曲の研究、後進の育成、「平曲会」の開催に情熱を傾ける。「平曲古今譚」「平曲統伝記」「平曲温故集」を著す。

佐野楽翁（太素次男）安政四年より平曲を学ぶ。明治二一年に大秘事内伝の記録がある。

館山漸之進（太素三男）安政四年より平曲を学ぶ。明治二一年に大秘事内伝の記録がある。

明治四十年、東京音楽学校調査保存課嘱託。明治四三年『平家音楽史』上梓。

折笠儀正（冬次郎義父）安政六年より平曲を学ぶ。大秘事相伝。

津軽平八郎（津軽家門閥、太素義弟）万延元年より平曲を学ぶ。大秘事相伝。

津軽八十五郎（津軽家門閥）明治十五年より平曲を学ぶ。小秘事相伝

楠美六五郎（太素五男）明治十六年より平曲を学ぶ。

小枝七雄（太素六男）明治十八年より平曲を学ぶ。大正十四年、

六五郎長男の一郎と晚翠孫の梅子の婚礼の席で平曲を語る。

楠美冬次郎（晚翠次男）楠美家十三代当主。明治十七年より

平曲を学ぶ。明治二二年灌頂相伝。りんごの栽培と研究を手

がけた。父晚翠の死後も楠美家の奥座敷で「平曲会」を行う。

楠美恩三郎（晚翠三男）明治十七年より平曲を学ぶ。

佐野龍之助（楽翁長男、熙）明治十七年より平曲を学ぶ。

佐野盈之進（楽翁次男）明治十七年より平曲を学ぶ。

佐野蔵之丞（楽翁三男）明治十八年より平曲を学ぶ。

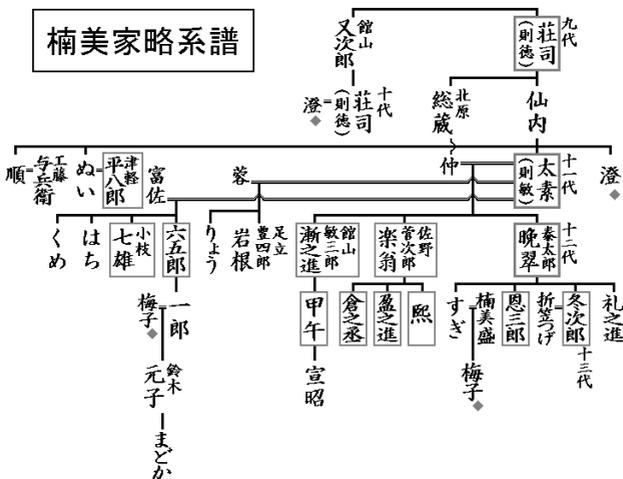
折笠ナキ（冬次郎義姉）明治十七年より平曲を学ぶ。

館山甲午（漸之進四男）明治二十七年生。昭和四四年、国選択

無形文化財技芸者の指定を受ける。

明治十七年前後、一族が一丸となって平曲伝承に心血を注いだことが伝われば幸いである。

楠美家略系譜



「平曲吟譜新集」と館山家所蔵の譜本

昭和三八年頃に、故金田一春彦先生が十三名で仙台に保存会結成の動きがあり、当時東京在住の私に父甲午から新聞記事が送られたのが、平曲発心の契機となった。父から借りる譜本はコピー本で、一部を余分にコピー返するのがきまりであった。謝礼であると同時に、高価ながら経年変化していく湿式コピーに対する知恵でもあった。コピーした譜本は平家正節の編纂どおりに六句ずつ丁寧に製本して大切に扱うように、譜本を粗末にする者には教えない、と父から厳重に言われた。かつて隣家の火事の類焼に遭い、琵琶と譜本をやっとの思いで救った館山家の家訓だったのかもしれない。

館山家には幕末から明治にかけて書写された譜本が約六十冊あるが、コピー本より貴重な写本ゆえ、なかなか整理できずにいた。できれば平曲二百句の知識を有する複数名で調査したいとも思っていた。昨年十月、山内とも子氏から受け継いだ古川久美子氏が私のもので十二年間の努力を重ね、二百句を相伝したので、遂に館山家所蔵の譜本を調査・整理することが叶った。以下に概要を示す。

一、楠美晩翠本（二十一冊）

1. 平家正節（七行書、十八冊）※「平曲吟譜新集」と同一の譜本を写した可能性が高い。
 - 一之上、一之下（二冊）、二之上、三之上、三之下、四之下、五之上、五之下、六之下、七之上（二冊）、七之下、八之上、八之下、九之上、十一之上、五句揃。

2. 平家正節抄（七行書、三冊）※各卷末に「明治十六年一月、楠美晚翠」の署名あり。また、「津

軽藩士楠美晚翠手記、昭和三十年六月、館山甲午製本」の朱書あり。鳴海家所蔵本と選句が少々異なるが、書写した時期が一月違いなので、当時の伝承の状況を知る手掛かりとなる。

抄之二（都遷、月見、八坂流訪月、文覚強行、文覚勸進帳、伊豆院宣、東国下向、五節沙汰、

都還、紅葉、小督、竹生嶋詣、火燧合戦）、

抄之三（木曾願書、實盛最期、山門返牒、平家連署願書、維盛都落、忠度都落、経正都落、

青山沙汰、福原落、山門御幸、宇佐行幸、生食、宇治川）、

抄之四（河原合戦、木曾最期、三草勢揃、老馬、一二駟、二度駟、坂落、忠度最期、

敦盛最期、濱軍、小宰相、海道下、千寿前）

二、東原漸造本（七行書、二冊）

平家正節十二之下（大庭早馬、入道逝去、経嶋、横田河原合戦）

平家正節十四之上（小朝拜、樋口被斬、河原合戦、六箇度合戦（後半欠）、一二駟（欠本））

三、楠美太素本（五行書、一冊）

（鶏合、生好、宇治川、那須与一、康頼祝詞）

四、津軽順承公自筆本（三十冊）

1. 平家正節（五行書、十八冊）※「津軽順承公手書、安政六年己未三月吉日、明治四十三年六月、伯爵承昭公より館山漸之進拜戴、平家正節三十三冊の内、館山甲午」の朱書あり。

三之上、四之上、五之上、七之上、七之下、八之下、九之上、九之下、十之上、十之上下、
十一之上（妓王）（願立）、十五之上、十五之下、読物上、読物下、五句揃、灌頂五句

2. 平曲節譜（五行書、十二冊）

九之中（樋口被斬、六箇度合戦、三草勢揃）

十之中（海道下、千寿前）、（横笛）、（高野卷、維盛出家）

十之下（熊野参詣、維盛入水）、（三日平氏、北方出家、藤戸、大嘗会沙汰）

十一之上（逆櫓、勝浦合戦、大坂越、嗣信最期、那須与一、弓流）

十一之中（志度合戦、鷄合、壇浦合戦、遠箭、先帝御入水、能登殿最期、内侍所都入）

十一之下（一門大路渡、平大納言文沙汰、副将被斬、腰越、大臣殿誅罰）

十二之上（重衡被斬、大地震、紺搔、平大納言被流、土佐坊被斬、判官都落）

十二之下（吉田大納言沙汰、六代乞請、泊瀬六代、六代被斬）

その他（康頼祝詞、卒都婆流、公卿揃（欠本）、大塔建立、頼豪、物怪（欠本）、朝敵揃、大庭早馬）

五、書写者不詳本（五冊）

五之下の内（燈籠、小朝拝）

灌頂五句（二冊、五行書、七行書、撥付）

小秘事二句（五行書、撥付、替節之句）

大秘事三句（欠本、補完本）

江戸時代の平曲譜本の構成や伝播には、俳諧の盛行も影響を及ぼしていたと考えられる。たとえば尾張藩士であった横井也有(1703年-1783年)は、荻野検校が尾張藩に招かれる前の宝暦八年に、平曲の「巻通し」をかたどって連句を巻いている。また也有が若い頃より写本した「平語」には、その節博士を胡粉で塗り潰し、安永五(1776)年に編纂された「平家正節」の譜記に変更した跡が見られる。「平家正節」の習い易さ、合理性をいち早く評価して、全国に先がけて享受していたのである。譜記を変更するという行為もまた興味深い。

「巻通し」はストーリーには全く関係ない楽しみ方で、革新的な存在である。「平家正節」はそのような側面から俳諧でも好まれたのではないだろうか。

いっぽう「平曲吟譜新集」は、「巻通し」を敢えて平家物語の順に戻すのであるから、オーソドックスな復古調的試みである。しかしながら、幕末の動乱二十年の間に、津軽平八郎が私(ひそ)かに辛苦の末に完成させた経緯も意義深いことである。

コピー本を湿式コピーして製本するだけでも気を遣うものであったが、写本には書写した者の経験と工夫が反映され、保存してきた者の思いがこもっている。デジタル化で便利になっても、「平曲吟譜新集」の重さを忘れずに大切に扱いたいものである。